

## 薄田泣菫『暮笛集』と与謝野晶子『みだれ髪』

——新体詩「尼が紅」「兄と妹」、『みだれ髪』同時代評をめぐって——

加 藤 美 奈 子

### 一 はじめに——薄田泣菫と与謝野鉄幹・晶子

「詩人・薄田泣菫」の死は次のように報じられた。

薄田泣菫氏（詩人、本名淳介）去る九日尿毒症のため、岡山県速島町の自宅で死去。享年六十九、著書に詩集『ゆく春』『暮笛集』等がある

（『朝日新聞』昭和二〇年一〇月一八日）

代表作「ああ大和にしあらましかば」を収めた詩集『白羊宮』（明治三十九年五月）にはふれられていない。泣菫は、明治四〇年以降、詩作は減少し、明治四五年より大阪毎日新聞社学芸部に勤務し、大正八年には学芸部長となっている（注1）。毎日新聞社時代の泣菫の随筆作品等については、『茶話』に代表される泣菫の随筆は、毎日新聞社社員として執筆され、右の記事は「朝日新聞」のものであるとはいえ、全く言及されておらず、その扱いは小さい、と言わざるを得ない。

「芥川直筆『地獄変』原稿」という見出しで新聞紙上（『朝日新聞』二〇〇七年二月二日）に芥川龍之介の原稿の「発見」が

報じられたことは記憶に新しいが、これは同紙によると「大阪毎日新聞社学芸部長を勤めた薄田泣菫（1877-1945）の孫ら遺族が出身地の倉敷市へ04年に寄贈した遺品の中から見つかった」ものであった。その原稿を倉敷市立中央図書館で展示されることを報じた、二〇〇八年二月八日付「朝日新聞 岡山全県版」の記事によると、「研究者の間では幻とされていた『地獄変』の直筆原稿を含む遺品五〇点は、市立美術館の特別展で以前公開されたが、注目されなかった。昨年12月、薄田泣菫顕彰会の依頼で倉敷市を訪れた片山宏行・青山学院大教授」らが「改めて学術的価値を見だし、新発見」として発表した」との経緯が報じられている（注2）。この「発見」も芥川の新資料として報じられたもので、泣菫は戦後、岡山・倉敷という地元にあつてさえ、いわば「忘れられた詩人」として扱われている感が深まる。

泣菫は岡山県倉敷市速島の出身である。「ああ大和にしあらましかば」の詩碑は昭和二九年、倉敷市速島町西之浦、厄神社境内に建立され、尽力した日夏耿之介の銘文も刻まれている（注3）。

研究書としては、松村緑『薄田泣菫考』（教育出版センター

昭和五二年九月）が殆ど唯一の泣菫を対象とした研究書であると言える。著者の東京女子大学名誉教授・松村緑は、同書の「著者紹介」によると、明治四二年、岡山市に生まれている。「天下の青年層の愛誦する所となった」（同書 一三四頁）が故に諸説あった「公孫樹下にたちて」のモデルとなった公孫樹を、津山市の長法寺に特定するなど（「公孫樹下にたちて」考）同書 二一九頁）、実証的な論が示されている。

親族による回顧記録としては、黒田えみ『薄田泣菫の世界』（岡山文庫二四五 日本文京出版 平成一九年二月）、満谷昭夫（泣菫の長女が母、泣菫と親交の深かった同じく岡山出身の画家・満谷国四郎の甥が父で、泣菫の孫にあたる）『泣菫残照―薄田泣菫関連資料を中心に』（創元社 二〇〇三年一月）があり、同書にも詩碑建立の経緯が示されている（同書 四〇頁）。

また、薄田泣菫顕彰会事務局の三宅昭三氏により、「泣菫小伝・一」（薄田泣菫顕彰会 平成一四年五月）から「泣菫小伝・七―拾遺篇―」（薄田泣菫顕彰会 平成二〇年七月）までの小冊子七冊が発刊されており、同顕彰会の会報「泣菫」（平成二〇年九月に第一五号まで刊行）と併せ、地元の倉敷では主としてこの会を中心に泣菫の顕彰がなされている。

私が研究対象としてきたのは与謝野晶子だが、上京前、堺にあ

った晶子も泣菫の作品に深い関心を寄せていた。「明星」第二〇号（明治三四年一月）に、鉄幹に宛てた書簡からの引用が掲載され、その中に「すきな／＼泣菫さまのために、あゝしてかかげたまひし君うれしく候」という一文が見出される。これは「明星」第八号（明治三三年一月）の巻頭に、泣菫の新体詩「破曉の賦」（『暮笛集』所収）が、大きく掲載されたことによるものである。与謝野鉄幹は、創刊した雑誌「明星」に泣菫の作品発表の場を提供しただけでなく、泣菫の作品・詩集を鑑賞・評価する作品を発表するなど（注4）、友人としての交流も含め、互いの関係は緊密なものであったと言える。

晶子と、山川登美子・増田（茅野）雅子の合同歌集である『恋衣』（明治三八年一月）の献辞にも、「詩人薄田泣菫の君に捧げまつる」とある。また、明治三七年七月に誕生した鉄幹・晶子の次男に（秀）（後に外交官。衆議院議員・与謝野馨氏の父親）と命名したのも泣菫であった（注5）。

逸見久美編『与謝野寛晶子書簡集成』第一巻―第四巻（八木書店 二〇〇二年一月―二〇〇三年七月）には、泣菫宛の書簡が一一通見出せるが、明治三八年より、大正期にいたるまで、鉄幹（寛）・晶子の泣菫に宛てた書簡が残されている。例えば、大正三年五月六日付の晶子からの書簡は、大阪毎日新聞社宛に送られており、「申わけなき違約の罪をいかにせばみ許しえ候べき」とあり、依頼された原稿の遅延を詫げる内容になっている。同書簡は、「良

人はそのうち御目もじいたすよし申居り候」と結ばれており、互いの交流は長く続いたものであった。

## 二 薄田泣菫「尼が紅」(『暮笛集』所収)と与謝

### 野晶子「みだれ髪」

後年の晶子は、自選の『与謝野晶子歌集』の「あとがき」において、泣菫と自身の作品との関わりについて、次のように述懐している(注6)。

私が歌を作り初めたのは明治三十年頃の二十歳前後からであつたようである。島崎藤村氏の新しい詩が雑誌『文学界』に発表され、続いて幾冊かの氏の詩集が出版され、薄田泣菫氏が新鮮な詩を多く示されたより後のことである。私は二氏に負う所が多いのである。(中略)私は詩が解るようになって居ながら、また相当に日本語を多く知りながら表現する所は泣菫氏の言葉使いであり、藤村氏の模倣に過ぎなかつた。(傍線引用者 以下同断)

「表現する所は泣菫氏の言葉使い」と、藤村と並んで、泣菫からの表現上の影響について自ら言及している。

晶子の最初の歌集『みだれ髪』の出版は、明治三四年八月、それに先だつて、金尾文淵堂から明治三二年一月、泣菫の最初の新体詩集『暮笛集』は発刊された。後に晶子の著書をはじめ、採算を度外視した美術的価値のある装丁・良質の文芸書を刊行した

ことで知られる大阪の書肆・金尾文淵堂にとつても最初の刊行物であつた(注7)。

次は、『暮笛集』巻頭の新体詩「古鏡賦」からの引用である。

こは古鏡、往にし世に、／額白かりし上臈の／恋得て髪を裁ちし時、／投けてしものと、君も見よ。(中略)

瞳子凝らし、少女子が／玉の額をながれたる／熱き血汐の湧きかへり、／春の潮と見る迄に、／昔の夢の騒ぐらし。

乱心地の堪へざるに、／泡咲く酒の零だに、／渴ける舌にふくませよ、(中略)背叩いて面撫で、／有心者得ぬと歌はんに。

「額白かりし上臈の」「熱き血汐の湧きかへり」「乱心地の堪へざるに」「有心者得ぬと歌はむに」といった表現が見出され、これらは、晶子の『みだれ髪』所収の次の短歌を直ちに想起させる。

額しろき髪よ見ずや夕ぐれを海菜に立つ春夢見姿

〔みだれ髪〕120／「明星」明治三四年七月

四条橋おしろいあつき舞姫のぬかさやかに撲つ夕あられ

〔みだれ髪〕305／「明星」明治三四年一月

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

〔みだれ髪〕26／「明星」明治三三年一〇月

みだれこちまどひこちぞ頻なる百合あむ神に乳おはひあへず

〔みだれ髪〕40

肩おちて縫にゆらぎのそぞる髪をとめ有心者春の雲こき

〔みだれ髪〕 103

「みだれ髪」所収の短歌への、泣蓮の新体詩の表現の摂取のあとが明らかばかりでなく、「あつき血汐」といった「みだれ髪」を最も特色づけているとされる表現にも影響関係が見出されるのである（注8）。

同じく『暮笛集』所収の新体詩「尼が紅」を例として見てみたい。泣蓮の新体詩「尼が紅」は、明治三十三年三月に雑誌「新著月刊」（注9）に発表された長詩で、後年、泣蓮が詩を自選した『泣蓮詩抄』の「自序」では、次のように述べている。

選をするにあたり、私はただ自分の好みにもみしたがって取捨をきめた。紙数が限られてゐるので、暮笛集では尼が紅、二十五絃では雷神の夢（中略）などの長篇を収容することができなかつたのを遺憾に思ふ。 昭和三年三月 薄田淳介

（薄田泣蓮『泣蓮詩抄』（岩波文庫 一九二八年五月）

第一刷／一九九九年二月 第二五刷 三頁）

同書の『暮笛集より』には、元の『暮笛集』の半数ほどの詩が所収されているが、特に「尼が紅」の採録が出来なかったことを昭和期になつても惜しんでいることから、泣蓮にとつて思い入れのある作品であつたようだ。構成は、一行七音・五音で、四行を一連として、一〇五連からなる長詩である。内容は、題が端的に示すように、恋とは無縁であるべき「尼」が、「許せ、沙尼が身

恋ありと」と、恋に心を迷わせており、その煩悶を吐露した、という趣向になっている。以下、特に顕著な例を挙げて、『みだれ髪』の短歌との表現比較を試みたい。漢数字は、「尼が紅」の各連に付されている番号である。

三 / そも女子を譬ふれば／鴟目くゞる組紐か、／姿ほそくも、吾恋の／こき紅に燃ゆる哉。

↓夏花のすがたは細きくれなるに真昼いきむの恋よこの子よ

（『みだれ髪』102）

八

／夏転疫に、羅衣の／袂かけても秘めたるを、／瘠せし頸にまかんには／あまりに惜しきかひな哉。

↓病みませるうなじに撫きかひな捲きて熱にかわる御口を

吸はむ

（『みだれ髪』373／「明星」明治三十三年九月）

十五 / 暫し木陰に、帙簀ときし／爽ある頃を忍びしも、／乳房さはりて吾胸の／力ある血に氣は立ちぬ。

↓春みじかし何に不滅の命ぞとちからある乳を手にさくらせぬ

（『みだれ髪』321／「明星」明治三十四年五月）

↓ちからある血を手にさぐるわれ（新潮社版『晶子短歌全集』大正八―九年）

七十一 / かの和肌（わだ）に手をふれて、／底の泉をさぐりみば、／天濃漿（あじ）か、枯木（かき）なる／男の知らぬ趣味を見ん。

↓やは肌（わだ）のあつき血汐（ちしほ）にふれも見でさびしからずや逆を説く

君

〔みだれ髪〕26／「明星」明治三年一〇月  
↓ゆあみする泉の底の小百合花二十の夏をうつくしと見ぬ

〔みだれ髪〕39／「小天地」明治三四年八月

七十二／燃ゆる思の苦しさに、／知覚なき木をかき抱き、／暫し吾世を泣く程に、／冷えたる幹を暖めぬ。

↓ひとまおきてをりをりもれし君がいきその夜しら梅だくと夢みし  
〔みだれ髪〕185／「明星」明治三年一月

六／春の夕ぐれ只ひとり、／堂にたれたる曼陀羅に、／瘡せし尊者の肩を見て、／おもむきもなき身を泣きぬ。

四十／貝多羅葉の末葉みて、／経思ひでん人ならば、／おつる血汐のあとをみて、／人哀ともしのばんか。

↓春にがき貝多羅葉の名をききて堂の夕日に友の世泣きぬ

〔みだれ髪〕231／「明星」明治三四年五月

八十二 吾劣らめや黒髪／櫛にもたへでほろ／と、／

こぼる、見れば、こは如何に、／緑の色のあせにたる。

↓その子二十櫛にながる黒髪のおごりの春のうつくしきかな  
〔みだれ髪〕6／「小天地」明治三四年八月

〔尼が紅〕三連に「姿ほそくも、吾恋の／こき紅に燃ゆる哉」がある。「紅」は、紫、胭脂などと並んで「みだれ髪」を最も特色付ける色彩である（注10）。

〔夏花のすがたは細きくれなゐに真昼いきむの恋よこの子よ〕

には、泣蓮の詩の、「くれなゐ」「恋」「すがた細き」といった表現が揃って表れている。

同じく三連「こき紅に燃ゆる哉」、七十二連「燃ゆる思」も、「いとせめてもゆるがままにもえしめよ」（『みだれ髪』320／「明星」明治三四年七月）、「血ぞもゆるかさむひと夜の夢のやど」（『みだれ髪』4／「明星」明治三四年五月）などの短歌に印象深く表れる。

〔尼が紅〕十五連には「乳房さはりて吾胸の／力ある血に気は立ちぬ」とあるが、「みだれ髪」では、「ちからある乳」となっており、「乳房」がここに投影された形になっている。晶子は、後に新潮社版『晶子短歌全集』（大正八―九年）でこの歌を、「ちからある血を手になぐるわれ」と表現を変えて採録した。「乳」から「血」への変更に、泣蓮の表現が想起されていることがうかがわれる。

引用した八連の「かひな」、七十一連の「和肌」、四十連の「貝多羅葉」、八十二連の「黒髪」・「櫛」などの例に加え、「尼が紅」には、「旅人」・「紫」・「桃の蕾」・「髪うちぬれて」といった、「みだれ髪」の中で印象深く表現されている素材が随所に見出され、「やは肌」・「黒髪」といった、「みだれ髪」を特色づける表現への泣蓮の影響が指摘出来るのである。

### 三 薄田泣菫「兄と妹」〔暮笛集〕所収〕と与謝野晶子の「非結婚主義」

与謝野晶子が自身の「非結婚主義」を語った文章に次のようなものがある。

自分は幼い時から動もすると死の不安に襲はれて平生少しの病氣もない健かな身体でありながら却て若死をする気がしてならなかった。(中略)又十七八歳から後は露西亞のトルストイの翻訳物などを読んで、結婚は罪悪である、人種を絶やして無に帰するのが人間の理想だと云ふ様な迷信が可なり久しい間自分を囚へて居たので、自分は固より、偶ま逢ふ同じ街の友人にも非結婚主義を熱心に勧めたりなんかした。

「私の貞操観」(雑誌帳) 大正四年五月  
晶子が明治三十年頃の自己を回想した部分である。ここで注目したいのは、「結婚は罪悪である、人種を絶やして無に帰するのが人間の理想」だとする極端な純潔論で、「非結婚主義」という言葉が見出される。晶子はこの考えを「トルストイの翻訳物」から得たとしているが、トルストイの「クロイツェル・ソナタ」が挙げられるのではないかと思う。トルストイの「クロイツェル・ソナタ」の示した非婚主義、男女の間の純潔を理想とする思想は、当時の知識人の間に少なからぬ影響を及ぼしていたという。その様相は、川村邦光「セクシュアリティの近代」(講談社選書 一九九六年九月)によると、次のようなものであったらしい。

トルストイは「純潔は規範や命令ではなく、理想である」とし、「肉の恋愛すなわち結婚は、自分自身への奉仕であるからして、いかなる場合においても、神と隣人への奉仕の障礙であり、従つて、キリスト教の見地から観れば、墮落であり、罪悪である」「相ともに協力して誘惑をのがれ、自己を清浄にし、神と人への奉仕を妨げる関係を廢し、肉の愛情に代えるに純潔な兄妹の關係をもつてして、罪惡を中絶するように精進すべきである」(「クロイツェル・ソナタ」米川正夫訳、一九二八年)と唱えていた。当時の少なからぬ知識人は、宗教家、トルストイを崇拜し、トルストイ教に帰依していたのである。

(同書 一四三—一四四頁)

「クロイツェル・ソナタ」に示されたトルストイの思想は、純潔を理想とし、結婚は「肉の愛情」であるから、墮落であり、罪惡であると見ている。「肉の愛情」に代える「純潔な兄妹」の關係をもつてして、罪惡を中絶するように精進すべきである、とするものであった。晶子は、当時の知識人の例に漏れず、この思想に傾倒していたのだろう。

文学的出版を果たす以前の晶子は「自分は清浄な女だ」(「婦人の青春時代」(「曙より」明治四四年七月))と日常的に感じていたという。「自己を清浄に」することを勧めるトルストイの思想には共感したことだろう。「純潔な兄妹の關係をもつてして、罪惡を中絶するように精進すべきである」という主張が、当時の

知識人に、少なからぬ影響を与えていたとあったが、泣蓮の『暮笛集』には、「兄と妹」と題された新体詩を見出すことが出来る。この詩は、交互に「兄」と「妹」それぞれの側から思いを、唱和する形式になっている。

#### 妹

み山の百合とみづからの／童貞をまもる心には、／恋もやがてはいたましき／むごたらしさの力のみ。／／男／こころは狼の／餌にうち勝たんねがひのみ、／兄よ、二人はいつまでも／生れの家にのこらまし

#### 兄

男女のもてあそぶ／恋といふなるたはむれも、／まことは世にもいたましき／性と性とのあらそひのみ。／／わが妹だにうべなはば、／われら二人は天つ女の／娶らず嫁かぬ清らさに、／清らさにのみ生きなまし。

#### 妹

うれしや、君はうべなひぬ、／娶らず嫁かぬ天をとめ／天つ童男のきよらさに、／きよらさにのみ生きむとて。／／うれしや、君はうべなひぬ、／今こそわれは常をとめ、／そのたぐひなき喜びを／今こそうたへ、高らかに。

「妹」が言う、「恋もやがてはいたましき／むごたらしさの力のみ」という「むごたらしさの力」は、「男／こころは狼の／餌にうち勝たんねがひのみ」と、肉欲の暗喩で語られ、嫌悪されている。

「兄」の方もまた、それに応じて、恋ということをも、「まことは世にもいたましき／性と性とのあらそひのみ」と断じている。「清らさのみ生きなまし」、「娶らず嫁かぬきよらさに、／きよらさにのみ生きむとて」という決意は、先のトルストイの提唱そのものを思わせる。このように、兄と妹が清廉潔白に生きる決意を互いに吐露しあい、二人は互いの非婚の決意を喜びあう、という内容である。

『薄田泣蓮年譜』（注11）の明治三二年、泣蓮二三歳、三月の項目には、「兄と妹」（愛妹と呼んで詩歌の手ほどきをした四歳年少の隣家の長女、三宅薫に贈った長編詩）とある。詩の最初に、「とこしへに照りわたる天つ日のもと御身ハ幸福にあるべし、然りわれハそを祈るべきぞ」という言葉が添えられている（注12）。

男女の精神的で清らかな愛のあり方を「兄妹」という呼称でとらえる表現には、先のトルストイの思潮などに影響されたこの時代の、特に若い知識人達の、恋愛に対する志向の典型が示されているのではない。薄田泣蓮の詩を愛読していた晶子も、この「兄と妹」という男女のあり方に共感を覚えたのではない。

晶子自身も、関西青年文学会の同人で、淡い憧れを抱いていた河野鉄南を、書簡中に「お兄様」などと呼んでいたことなどが想起される（注13）。晶子の歌に、

御手御手にしひても白き花もたせ一の兄上なかの兄と云はば如何に  
（拾遺明治三四年106／「明星」明治三四年五月）

という例があるが、この歌も、そうした傾向をふまえると理解しやすい。一首は、「二人の男性に向かつて、「しひても」と言うように、敢えて恋の対象とせず、その関係の清廉なことを象徴する「白き花」を持たせて、「兄」と呼んだとしたなら、あなた方は「如何に」、どう思われますか、とこれは、「妹」の立場から呼びかけているのである。

#### 四 「みだれ髪」同時代評をめぐって

先に見たように、新体詩「尼が紅」一篇からも、泣菫の新体詩の「みだれ髪」への影響の少なくないことが確認された。そのような影響関係を、同時代の評者はどう読んでいたのだろうか。次は「みだれ髪」発刊の翌々月の評である。

今や晶子の「みだれ髪」を批評すべき順序となりぬ、鳳晶子其人の名を聞く毎に、幾多の批評家は曰く、やは肌派、曰く口つけ派と、斯の如くして或は拳を其面に加へむと欲し、或は爪をその後影に弾く、明治文学史上中、巾幗の出づる素より多からず、一葉の盛名を荷へる、彼が如くして、贅詆の随ひ到らざるに先ちて逝けるや、識者彼がために之を至幸となしき。晶子に至りては、名を成すこと未だ大ならず、而して説謗騰起、却てその名を大成す、我之を以て又竊に彼がために至幸となさざるを得ず。(中略)公等乞ふ、近いて「みだれ髪」の実体を検せよ。

「みだれ髪」に是有り「病みませるうなじに緋きかひな搥て熱に乾ける御口を吸はむ」と、然れども公等は、これに先ちて世に公にされた藤村の「若菜集」に「知りたまはずやわが恋は、云々、雄々しき君の手に触れて、嗚呼口紅をその口に、君にうつさでやむべきや」のいかに「口つけ」体としての絶好標本を成せるを知らざる歟。

「みだれ髪」に是有り、曰く「やは肌の、あつき血汐に触れも見て、さびしからずや道を説く君」と然れどもこれに先ちて幾多の物議に上りたる泣菫の「暮笛集」に「かのやは肌の手を触れて、底の泉をさぐり見は、天の濃紫が枯木なる、男の知らぬ趣味を見む」のいかに「やは肌」家の開山なるかを看すや、而して彼に在りては無上の敬虔、是にありては無下の嫌忌「くちつけ」「やは肌」もし功あらば彼等を頌せよ、罪あらば罵くんぞ彼等を規せざる、抑も彼等の言ふところ必ず審美感にして、是の謔ふところ竟に実感に過ぎずとは、公等如何の立証ある、抑も又言ふところ一、言ふものに男女の別あるがために、彼を捨てて是を咎むとは言はむか、詩国の倫はさる窮屈なるものにあらざるべきをや。(略)晶子の詩、この他に語句の末に於て、藤村泣菫に似たところ多し、(中略)今一一対照せずと雖、この点に於て「我歌に師承なし」と放言せる躬治氏と其倜傥を競ひ得ず。

時文字「新派歌人評論」(「文庫」明治三四年一〇月)(注14)

「鳳晶子」の名がこの時点で「口つけ派」「やは肌派」と喧伝され「或は拳を其面に加へんと欲し、或は爪をその後影に弾く」と中傷されている状況が語られている。「明治文学史上」では「巾幗」、女性性が活躍する例は少なく、一葉が盛名を荷ったが批判を受ける前に亡くなったことを、「識者」は一葉のために幸運としたというのである。晶子の場合には逆に「讒譏騰起、却てその名を大成す」と、誹謗の言が喧しかったために、却ってその名が知られることとなったと説明している。「文庫」の評者はそれを「又竊に彼がために至幸となさざるを得ず」と言う。文中の「公等」は、引用の前に「七尺の丈夫」「やは肌」に毛起し、且つ「口つけ」に駭倒し」とある部分を受けており、「口つけ」「やは肌」は、藤村・泣菫に先例が見られ、それらを褒めるなら、「男女の別あるがために」「晶子だけ非難されるのはおかしいではないかという主旨である。また、「晶子の歌、この他に語句の末に於て、藤村泣菫に似たるところ多し、(中略)今一一対照せずと雖、この点に於いて『我が歌に師承なし』と放言せる躬治氏と其倨傲を競ひ得ず」としている。「我が歌に師承なし」は、服部躬治『迦具土』(白鳩社 明治三四年七月)の自序に、「されど、師承なきわが詩には、猶且、若き生命もあらむか」とあることによる。躬治の『迦具土』は「文庫」の同文中に、

『紫』『迦具土』而して『みだれ髪』、三書突如文壇に落ち来りて、和歌の一大劈開は創まれり。

と見えるように、鉄幹の『紫』、晶子の『みだれ髪』と同時期に出版され、この「三書」が、「新派」を代表する歌集として注目されたことが伺われる。

右の「文庫」掲載の評では、多くの言説が、『みだれ髪』の「口つけ」「やは肌」に代表される用語に幻惑されている中で、早くからその独自性に疑問を呈していることに注目される。特に、評者の指摘する「尼が紅」の用語と晶子の短歌との影響関係については、先に見たとおりである。

にもかかわらず、『みだれ髪』の出版と同時に与えられた批判的な評価の印象は払拭されることはなく、この評に先行する、『みだれ髪』への誹謗の言説を代表する「心の花」(無署名「歌集総まくり みだれ髪」/竹柏会 明治三四年九月)の評者の言「娼妓、夜鷹輩の乱倫の言」といった誹謗こそが、幾度となく引用されることになる。

「心の花」の批評では、すでに泣菫の「尼が紅」からの表現摂取が顕著な例として挙げた、「力ある乳」(『みだれ髪』32)、「病みませるうなじに織きかひな捲きて熱にかわける御口を吸はむ」(『みだれ髪』373)、「ひとまおきてをりをりもれし君がいきその夜しら梅だくと夢みし」(『みだれ髪』185)等の短歌・表現が引用され、作者である「鳳晶子」自身の実事をそこに憶測し、あげつらわれているのである。

一般に、『みだれ髪』の同時代の評価としては、この「心の花」

が「時代的な無理解」により誹謗中傷した一方で、「なにがし」の署名で上田敏が「明星」に寄稿した「みだれ髪を読む」(「明星」明治三四年一〇月)で絶賛した、とされるのだが、私はこのことにも疑問を感じている。旧稿(注15)で既に論じたので詳述しないが、上田敏「みだれ髪を読む」では、後に「みだれ髪」の代表歌とされる歌はほとんど評価されず、古典に依拠した穏当な作品を引用しているに過ぎないという印象を受ける。ただ、先にも見た、「やは肌の」の一首は引用しているのだが、上田敏は次のような評価を加えている。

此集の基絃を弾じ得て明らか。「寂しからずや」とは枯淡なる凡骨を罵り得て妙。「第一の石を投げ得る者」世間幾人ぞ

「みだれ髪を読む」(前掲)

「第一の石を投げ得る者」は、「聖書」のヨハネ伝八章の「姦淫した女の裁判」のイエスの言葉「汝らの中、罪なき者まづ石を擲て」(「略注旧新約全書」興文教会 大正五年六月)によっている。上田敏は「一首に「姦淫した女」の存在を想起していたことになる。

「心の花」は、「これが御婦人の作です」と、作者が女流であることを前提として評を成していたが、上田敏にしても「女性の作として」という但し書きを付した上での評言であった。どちらにも、「みだれ髪」に、「夜鷹」・「姦淫した女」という性的に放埒な女の内容を読んでいたことに変わりはない。

「心の花」による批判は、先の「讒譚總起、却てその名を大成す」

といった表現どおりに機能し、「みだれ髪」はこの非難の文脈においてこそ、確立されたのではないか、という印象を受ける。

詩の先駆者としての泣菫は、明治四〇年代には詩の筆を折り、新聞人として、また、『茶話』に代表される随筆家として再起する。藤村もまた新体詩から、『蔽戒』・『新生』の小説家へと転向した。晶子は、生涯歌を詠み続けるが、先にも引用した自選の歌集の「あとがき」(注16)には、続けて次のように述べている。

後年の私を「嘘から出た真実」であると思って居るのであるから、この嘘の時代の作を今日も人からとやかくといわれがちなのは迷惑至極である。教科書などに、後年の作の三十分の一もなく、また質の甚しく粗悪でしかない初期のものの中から採られた歌の多いことで私は常に悲しんで居る。

泣菫の新体詩との比較を通してみる時、晶子自身が「みだれ髪」が先人の模倣であると言明するのは尤もであるが、「嘘」と退ける述懐は、かつて、「女性として」非難を浴びせられ、「みだれ髪」の晶子」として位置づけられ続けたことへの弁明と、抵抗を思わせる。

一方、泣菫の『琴笛集』は、いつか忘れられた詩集となり、「みだれ髪」の表現は、新時代の屹立する自我の表象とされ、その位置を超克することは、晶子の生涯を賭しても果たし得なかったと言えよう。この齟齬の上にこそ、「情熱の歌人・与謝野晶子の「みだれ髪」」は成立しているのではないか。

## 五 おわりに

本稿は、「平成二十年度 岡山大学言語国語国文学会」（平成二十年七月五日）に於て、「薄田泣菫」「暮笛集」と与謝野晶子「みだれ髪」―新体詩「尼が紅」「みだれ髪」同時代評をめぐって―と題して発表した内容に基づいて稿を起こしたものである。口頭発表は、拙稿「与謝野晶子の短歌における薄田泣菫の影響―新体詩「尼が紅」（「暮笛集」所収）と「みだれ髪」の描いた尼」（「吉備地方文化研究」（就美大学吉備地方文化研究所）第一八号 二〇〇八年三月）を端緒としており、発表では、前稿で指摘し得なかった用例を挙げ、本稿では、薄田泣菫顕彰会事務局の三宅昭三氏による資料を参照し、「兄と妹」に關しても言及した。

口頭での発表時に紹介した、渡邊護先生による講演記録「薄田泣菫の文学―万葉集からみた泣菫の詩―」（「薄田泣菫顕彰会会報 泣菫」第六号（平成一六年二月））によると、上代を想起させる泣菫の詩の表現が意外にも、『万葉集』までは廻り得ないことが、「泣菫は明治の頃、古い言葉求めて廻って行ったのですが、どうも出会いの場所は『源氏物語』の辺りが一番濃いようです。先ほどの「ああ大和にしあらましかば」の「ましか」も、平安以降の言葉ですから、『万葉集』までは行かないようです」と指摘されている。私自身、与謝野晶子と『源氏物語』の影響関係について、旧稿で論じてきたこともあり、大きな示唆を与えられた思っている。

また、泣菫の側からの、晶子への言及の有無について、質問頂いたが、一例として、大正三年、パリから帰国した晶子を迎えた折の随筆「晶子さんが帰って来た」（『泣菫隨筆集』富山房百科文庫43 一九九三年四月）が挙げられる。泣菫が、「今度の旅行の途次なり、滞在記なりを読んでそのたびごとに失望させられた」と批判的に述べていることが印象に残る。また、昭和期の晶子は、優れた詩人の名前を列記する中に、もはや藤村・泣菫を挙げていない（拙稿「与謝野晶子の短歌における薄田泣菫の影響」（前掲））。多年に亘る関係の中で、寛・晶子・泣菫らの、表現者としての互いの評価の変化が思われる。稿を改めて、泣菫・晶子をはじめとする近代詩歌における古典摂取、表現者としての泣菫・晶子の相互の關係について研究出来ればと考えている。

### 注

- (一) 松村緑編『薄田泣菫年譜』（『日本近代文学大系』第一八巻 土井晩翠・薄田泣菫・蒲原有明集）角川書店 昭和四七年三月）五〇―一五〇二頁
- (二) 薄田泣菫顕彰会事務局・三宅昭三編集『薄田泣菫顕彰会会報 泣菫』第一四号（平成二〇年二月）に、「芥川龍之介資料」記者会見の報告」として青山学院大学文学部日本文学科・片山宏行教授が報告文を寄せている。「井下氏（前掲池寛記念館館長 井下正三氏）は三宅氏（薄田泣菫顕彰会事務局長 三宅昭三氏）とコンタクトをとって倉敷市に赴き、泣菫の御遺族から市に寄贈されたという」（薄田泣菫関

連資料」を横分、そこに芥川をはじめとする多数の近代文学者の原資料があることを知って、ただちに私（片山教授）に知らせてくれたのであった」（「内引用者」と、この報道の経緯が説明されている。この「多数の近代文学者の原資料」の中には、泣蓮と親交のあった与謝野鉄幹（寛）・晶子の書簡等も含まれている。私自身、薄田泣蓮顕彰会会長の三宅昭三氏、資料を管理する倉敷市文化振興課主任の秋山剛氏に紹介頂いた書簡を順次紹介したいと計画している（『就実論叢』（二〇〇九年三月）に「資料紹介」として掲載予定）。

（3）詩碑建立の経緯は、松枝喬「泣蓮詩碑建立の思い出」（薄田泣蓮顕彰会事務局 第一版 平成一三年三月／第二版 平成一四年三月）に詳しい。松枝喬氏（元倉敷市議会議員・前倉敷文化連盟会長）は、薄田家の主治医で泣蓮と交流のあった松枝新を父としている。薄田泣蓮顕彰会の初代会長 三宅昭三「第二版 あとがき」同書。

（4）『国文学』第十三号に掲げられた与謝野鉄幹の「暮笛集——薄田泣蓮君を想慕して——」と題する一篇の詩のみがすぐれた批評の名を許すに足るものである。（中略）鉄幹はこの新進詩人の天分を高く評価したのである（『松村録』第二章 詩人・前期 五）『薄田泣蓮考』（前掲 四三—四四頁）

（5）「わが子の名前と由来（アンケート）◇子供の名と名附親の名」に晶子は次のように回答している。

長男光（上田敏博士）、二男秀（薄田泣蓮先生）、長女八峰（森鷗外博士、二女七瀬（同上）、三男麟（良人）、四男アウギユスト（ロダン先生）。

以上子供の名と名附親の御名とを認めて差出します。その他は略します。

（主婦之友）（第一一巻第二号、一九二七年二月）／『與謝野晶子評論著作集』第一九卷（龍溪書舎 二〇〇二年二月 二五四頁）

（6）与謝野晶子自選『与謝野晶子歌集』「あとがき」（底本 岩波文庫版（初版 一九三八年七月 一九四三年 改版）岩波文庫 三六一頁）。

（7）石塚純一「金尾文淵堂をめぐる人びと」（新宿書房 二〇〇五年二月 一一頁）

（8）『解題 薄田泣蓮』（明治文学全集五八 土井晩翠 薄田泣蓮蕭原有明集 筑摩書房 昭和四二年四月 三九一頁）において、矢野峰人が次のように述べている。

「尼が紅」の数節は、藤村の「おくめ」を偲ばせるが、わけても前者の

儘よ水面にくるめくも、／吾れ金色の羽ふりて、／紅の香高き唇を、／君にふれては止むべしや。

は、後者の

しりたまはずわがこひは／雄々しき君の手に触れて／嗚呼口紅をその口に／君うつさでやむべきや

を原型とせるかの観あり（中略）更に面白いのは、「尼が紅」の

かの和肌に手をふれて、／底の泉をさぐりみば、／天濃紫が、枯木なる／男の知らぬ趣味を見ん

が、与謝野晶子の有名な

やは肌の熱き血しほにふれも見でさびしからずや道を説く君の原型ではないかと思はれる事である。

これらの例の他にも、「琵琶湖畔にたちて」（『暮笛集』）に、「あつき血汐や覚ゆらめ」とあることを指摘しておきたい。

(9) 「新著月刊」は、「文芸雑誌。明治三〇、四、三・五。通巻一五冊。小説を主とする文芸雑誌で（中略）編集人後藤寅之助（宙外）（中略）詩人として泣菫が名を得たのはこの誌によつてとされている」（『日本近代文学大事典』第五巻 新聞・雑誌（講談社 昭和五二年 二〇三—二〇四頁））

(10) 「みだれ髪」を特色付ける色彩表現に関しては、拙稿・加古美奈子「みだれ髪の色表現」（『岡大文学論稿』第二五号 平成九年三月）で論じた。

(11) 前掲注（一）四九八—四九九頁。

(12) 松枝喬「泣菫詩碑建立の思い出」（前掲注（3））には、「おとどひ—泣菫先生の初恋」と題して、「兄と妹」の「妹」になぞらえられる「三宅薫」の弟である三宅千秋氏から、泣菫が薫に贈った「おとどひ」を譲り受けた経緯が語られている。「おとどひ」は、「兄と妹」の謂わば私家版で、能筆であった泣菫自筆の「小さな手書きの本」だという。松枝氏によると、「薫さんは明治十四年生まれで、泣菫先生より四歳年下ですが、写真に見るように美しい方です。泣菫先生は語学が大変達者であり、隣の家千秋さんに英語を教えていたそうです。そういう関係で、千秋さんのお宅にはしょっちゅうお行きになっています」（同書 二五頁）という関係であったという。また、「おとどひ」には、「一番上に、「すみれに泣きし子」と書かれて」いる、とあり、「泣菫」の筆名の由来となったと推測されている。

(13) 逸見久美「第一章 生い立ち 第二節 娘のころ」（『評伝・與謝野鐵幹品子』八木書店 昭和五十年四月）

(14) 本文の引用は、逸見久美編『近代文学作品論叢書 4 与謝野品子「みだれ髪」作品論集成I』大空社（一九九七年）によった。

(15) 拙稿・加古美奈子「與謝野品子「みだれ髪」の成立—「みだれ髪」同時代評、與謝野品子と夏目漱石の表現比較」（『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第九号 二〇〇〇年三月）

(16) 前掲（6）に同じ。

底本（漢字の旧字体は新字体に改めた）

『定本 與謝野品子全集』（講談社 昭和五四—五六年）

短歌の後の（ ）内は（『歌集名』同全集による歌番号／『初出誌名』初出年月）の順に表記した。同全集に掲載されていない歌集の献辞・鉄幹の歌集等は、『鉄幹品子全集』（勉誠社 平成一三年）によった。

逸見久美編『近代文学作品論叢書 4 与謝野品子「みだれ髪」作品論集成I』（大空社 一九九七年一月）

『薄田泣菫全集 第一巻 詩篇』（創元社 昭和一三年二月）

『荜管集』（金尾文淵堂 明治三二年一月）は、初版本を底本とする『明治文学全集 五八 土井晩翠 薄田泣菫 蒲原有明集』（筑摩書房 昭和四二年四月）によった。

（かとう みなこ 就実短期大学講師）

#### 研究室受贈圖書雑誌目録V

国語國文研究（北海道大学国語国文学会） 一三三、一三四

国語国文論集（安田女子大学日本文学会） 三八

國語と教育（長崎大学国語国文学会） 三三

国語の研究（大分大学国語国文学会） 三三